

## 救護隊に思いを馳せる

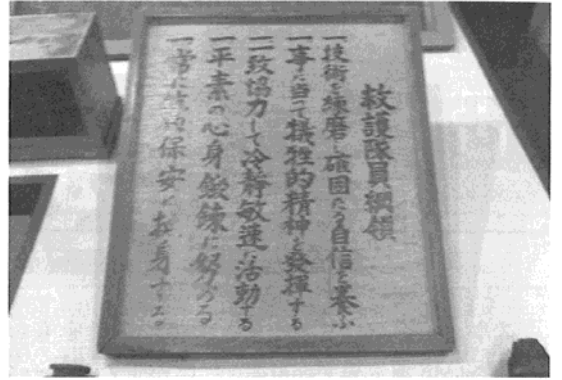
北海道の夕張市にある、石炭博物館を見学しました。廃坑後の鉱山をテーマパークとした立派な博物館です。展示館と見学坑道の両方を用い、石炭の巨大な露頭も見ることができます。また、近隣地区にある従業員クラブは、石炭が栄えた時代の福利厚生の立派さを忍ばせる建物です。戦後の日本経済の牽引役であった石炭産業を垣間見ることができます。一方、石炭産業は災害の多い産業でした。夕張だけで14回の爆発事故や火災があり、2,000人近くの方が亡くなられています。最も新しい事故は、昭和60年に起きています。夕張のすべての鉱山が閉山する直前でした。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」

展示のなかに、救護隊に関するものがありました。正式には鉱山救護隊。鉱山法で設置が決められている特別編成の組織。救護隊員は、当該の鉱山の鉱員から選抜され、訓練を受けて任命されます。救護隊員は2隊あり、4名13班編制となっていました。構内事故による非常事態に対応するため、生命の危険がきわめて大きい仕事でした。それだけに仲間の模範隊員として認められ、仕事に誇りも感じておられたようです。

実際に事故が起きたとき、最初の仕事は「探



▲5項目からなる救護隊員綱領

見」です。事故の広がりや被害を探索し、被災者の状況を確認して、それを対策本部に報告する任務です。救護隊がもたらす情報によって災害の規模を把握した対策本部は、応援態勢を組んだり、具体的な救援活動に乗り出したりすることになり、その救援活動の先頭に救護隊員が立ちます。

博物館に救護隊員の綱領が掲示されていました。「技術を錬磨し確固たる自信を養ふ。事に当たって犠牲的精神を発揮する。一致協力して冷静敏速に活動する。平素の心身鍛練に努める。常に鉱内保安に挺身する」の5項目です。研修施設に掲げられ、隊員手帳の表紙裏に印刷され、訓練の前に唱和する大切な綱領だったようです。

産業が発展するなかで、安全に対する投資が進んだ現代では、救護隊に類する仕事は見られなくなりました。しかし、救護隊に見られる「人間として、仲間のために力を身につけ、発揮する」営みを思い出しておくことは、自らを律する基になると感じます。

(参考 田巻松雄著『夕張は何を語るか』吉田書店)

(MBO 実践支援センター代表)

